



伊豆の秘密

近藤 健司



「えっ熱海城って本当にあったお城じゃないんですか？」

大久保菜奈は驚きの声をあげた。

「中に入らなかったの？エレベーターも完備だよ」

そう言ったのは図書館長の本多勲だ。菜奈はこの函南図書館で働いている。

実家は伊豆なのだが、父の仕事の関係で幼い頃から東京に住んでいたため、伊豆の知識は皆無と言っている。

東京で小学校教師をやっていたが、想像以上のブラック業務で心身ともに破壊された。

子供を育てるやりがいのある仕事なんだとキラキラした世界を夢想していたが現実は違ったのだ。

実家で数か月は休養生活を送ったが、いつまでも働かないわけにはいかず、ハローワークで今の職を紹介してもらった。図書館司書の資格は大学時代にとっており、本は嫌いではないので働くことにしたのだ。

「大久保さん。仕事も伊豆のこともゆっくり知っていけばいい」館長の優しい言葉が体にしみる。

司書の仕事は本の整理ぐらいだろうと思っていたのが大間違いで本の入荷や読み聞かせなど仕事は山ほどあるのだ。

「もしもし函南図書館です」菜奈は図書館にかかってきた電話に出た。

「レファレンスを利用したいのですが」

レファレンスサービスとは利用者が欲しい情報や資料を図書館側がサポートすることだ。具体的には利用者にあった本を探したり、時にはデータを見つけてきたりもする。

ただ大抵の人は「こういう本を探して」などといった聞き方なのだが。

レファレンスと単語を出したということは、電話の主は図書館をよく利用する仕事をしているのかも
しれない。

「土肥金山について調べているんです」

利用者が求める情報を聞いた次は、目的を聞く必要がある。例えば小学校で利用するといった要件なら年齢に合った分かりやすい本が必要になる。対して大学の論文など詳しい資料を求めている人には、古い資料を書庫から引っぱり出すこともある。

「土肥金山ですね。どういった要件でお調べになられていますか」

「埋蔵金を探しているんです」

「埋蔵金…」

予想外の返答に驚いた。こういったときはどうすればいいのだろう。埋蔵金にまつわる本？伊豆の歴史が書かれた本？それとも古文書とかになる？

「星座が書かれた本を探してほしいです」

「星座？」

つい腑抜けた声を出してしまった。星座の本ならたくさんあるがそれでいいのだろうか。

明日の14時に来館するらしく、菜奈としてはそれまでに資料を揃えておかなければならない。

一

依頼人は、14時きっかりにきた。見た目は若く20代だろうか。埋蔵金という言葉から、がっちりとした体格を予想していたが、予想が外れて細身だ。

「えっと約束していた資料なんですけど」

「ありがとうございます」

男は菜奈の用意した星座の資料を片っ端から読み始めた。

結局男は閉館ギリギリまで図書館で調べ物をし、菜奈に星座の資料を返した。

「ありがとうございます」

「あのお。埋蔵金と星座ってなにか関係があるんですか。こちらとしてもお役にたきたいので」

「そうですね。僕は伊豆出身なのですが、育ちは東京で…」

何か言いたいのが戸惑っているようだ。しかも言っていることが要領を得ない。

それにしても出身は伊豆で、育ちが東京とはなかなか自分と境遇が近い。

「私も東京育ちなんです。学校の先生をやっていたんですけど…」

「えっ僕もです」

驚くことに男も同じく東京で教師をやっていたそう。体を壊し実家に戻ってきたのだという。ここまで似た境遇で話が弾まぬわけではない。

男の名前は平井恵太。高校の国語の教師をやっていた。幼い頃に少しだけやっていた剣道を引き合いにだされて剣道部の顧問になったのが運の尽きで、土日は部活の練習に大会と、数か月休みなしの毎日を送った。

遂には倒れてしまい実家の伊豆に戻ったというわけだ。

「平井さんは土肥金山の埋蔵金を探しているんですね。本当にあるんですか？」

「分かりません。一般的にもそんな情報は一切知られていません。ただ、伊豆には何か秘密があるような気がするんです。人々が何かを隠しているような……」

「伊豆の人が？いい人ばかりですよ」

菜奈は、伊豆のことは全く知らない。しかし伊豆に来て、人のよさは実感している。ましてや隠し事なんて……

「もちろん。僕も伊豆の人は大好きです」

「ただここにきて少したったところのことなんです……」恵太は菜奈にゆっくりと語り始めた。

恵太には近所に行きつけの飲み屋があり、そこでその日も晩酌をしていたそうだ。

地域史に興味があった恵太は土肥金山をはじめ伊豆について色々と調べていたらしい。

「冗談で土肥金山の埋蔵金が伊豆のどこかにあるんじゃないかなと言ったんです。そしたら」

「空気が変わった」菜奈は言葉を引き継いだ。

恵太はすぐに菜奈の顔を見た。

「私も似たような経験があります」

菜奈が図書館司書になったばかりのことだ。館長をはじめ先輩たちに伊豆のことについて教えてもらっていた。

「金色夜叉は読んだことある？」

「イギリス村は行った？」

「MOA美術館には尾形光琳の絵があるんだよ」

などと伊豆の魅力を次々と伝授された。元来の生真面目さで、教えてもらった場所には悉く出向いた。

「そういえば、土肥金山にはまだいつてなかったです」

「あそこも面白いよ。家康公が天下泰平のために金山経営に力を注いだと言われているよ」

「へえ。じゃあ徳川埋蔵金伝説とかあるんですか」

どこかで聞いたことがあるような「徳川埋蔵金」という言葉を使った。後から分かったが徳川埋蔵金は幕末の頃の埋蔵金であり家康とは何の関係もない。

だが図書館の職員たちの反応は菜奈の無知を笑うものではなかった。空気が一変したように思えたのだ。いや普通に生活していれば感じない程度の違いである。しかし教師として働いていた職業癖からなのか、菜奈は1ミリの違いを感じ取ったのだ。

「私もお手伝いさせてください。来てまもないですが私も伊豆の市民です」

「ありがとうございます。僕も同じ気持ちです」

「ではまず一緒にこれを解きましょう」

恵太が一枚のメモ書きを渡してきた

「暗号です」

二

菜奈は自宅のベッドで恵太からもらった暗号とにらめっこしていた。

恵太が本格的に土肥金山の埋蔵金について調べるように思った経緯は、亡くなった祖父だった。祖父の死後、納屋を整理していると生前、土肥金山について研究していた痕跡があった。父や母からそのような話は一切聞いたことがなかったし、本人からもそういった素振りも一切なかったため、秘密裏に研究していた可能性が高い。

普通ならば、正々堂々と研究をすればいいのだ。しかしそうはいかない理由があったに違いない。

「土肥金山」「埋蔵金」「伊豆の人々」はつながりがあると恵太はそう直感した。

恵太は祖父の遺産（土肥金山研究）を隈なく調べ尽くし唯一理解できなかったのが例のメモ書きなのだ。

メモ書きの暗号は「川」という漢字に見える。いくつかの黒丸を結んでこの形になっており何か理由がありそうだ。さらに真ん中の線の一番上だけなぜか◎だ。

恵太が星座の資料を調べていた理由はこれだった。点をつないで形をつくるものといえば星座だ。似たような形の星座がないか調べていたのだ。

菜奈は恵太の話を客観的に考えた。

この訳の分からないメモ書きが暗号である保証は一つもない。あの世で聞いてみたら、ただの落書きで何の意味もありませんでしたというオチのほうがすんなりと納得できるではないか。

意味不明のメモ書きを見つめながら、菜奈は夢の中に入った。

三

菜奈と恵太は土肥金山に実際に行くことにした。金山は伊豆の西側にある。食事ができたり砂金堀りができたりとテーマパークのようでもある。

しかし金山の歴史を調べると、この金山の歴史的な重要性が分かる。金山といえば新潟佐渡の金山が有名だが、なんとそれに次いで全国二番目の産出量を誇ったという。

1601年に徳川家康が金山開発に注力

し、土肥の金山は栄えた。その栄光は凄まじく、人家が軒を並べて「土肥千軒」と称された。

「眠たくないですか。運転変わりますよ」函南から土肥金山まで約40キロ。帰り道となるとさらに疲れる。

とはいえ恵太とのドライブは楽しい。恵太は源氏物語が好きらしく意外な一面も知れたのだ。

菜奈は、源氏物語の流れで「ベルサイユのばら」の魅力を熱弁した。つつい自分ばかりが喋ってしまうのが自分の悪い癖だ。ただマリーアントワネットの魅力について語りたいたことがまだまだある。

「ベルサイユのばら、ぼくも読んでみますよ。それにしても結構移動しましたね」

「ここからは下田街道を北に行くだけなので大丈夫です。私が運転します」

菜奈は運転を変わり車で北進し函南へ向かった。

「狩野川が夕日でキラキラしていますよ」助手席の恵太が川を指して言った。

確かに東京にいたときは川だの山だの、自然の景色を楽しんだ記憶がない。伊豆にきて初めて自然の偉大さ、美しさを享受することができている感覚がする。

「一応案内は任せてください。僕、結構地図が好きでカーナビは頼らない派なんです」

「珍しいですね。私方向音痴なんで、スマホかカーナビがないと無理です」

恵太が鞆から地図を出して伊豆半島の地図を出した。

菜奈は地図を見て頭の中に電気が走った。

「ちよっと停めていいですか」菜奈は近くのコンビニに立ち寄った。

「この暗号、伊豆半島の道路に近いと思いませんか」

「確かに三本の縦線があります。黒丸を当てはめてみましょう」

「これって：図書館？」

「左の黒丸は上から、沼津図書館、土肥図書館、西伊豆図書館になります。右の線は伊東図書館、東伊東図書館になりますね」恵太が興奮を抑えて冷静に話す。

「ちよっと待ってください。なんで図書館なんですか」

「誰も疑わない場所だからかもしれません」

「図書館は公共のすべての人のために存在する欠かせない場所だ。そこをつぶして掘ろうとする人間はいない。」

「土肥金山の莫大な資金を、当時の藩は扱いに困ったと考えるはどうでしょうか」

「参勤交代にも見られるように、幕府は藩が財を持ちすぎることを嫌った。そのため藩は金を密かに埋めた。」

「伊豆の人が代々受け継いだ秘密」

「はい。その場所にわざわざ図書館を立てていったというわけです」

「真ん中の線はどの図書館ですか？」

「下から、天城図書館、葦山図書館、そして◎が函南図書館です」

「えっ函南図書館？」

菜奈は声をあげた。暗号の◎が指す地点が自分の職場だったのだ。

「函南図書館に最も金を分配して埋めてるってことでしょうか」

「わかりません。ただ函南図書館に何かあることは間違いないでしょうが」

「行きましょう。函南図書館に」

四

函南図書館には館長が待ち構えていた。私たちが調べまわっているのをおそらく知っていたのだろう。

「楽しい観光はできましたか」笑顔で聞いてきた。

「館長。正直に言ってください。函南図書館のどこかに埋蔵金が眠っているんですか」

菜奈はここまでの推理をすべて話した。

「そんなわけないでしょう、大外れです」

「秘密を守ろうとしているのは分かります。でも本当のことを……」

「本当のことを言っています。平井操の暗号は解読できていませんよ」

「えっ」菜奈はつい声をあげた。

「なぜ祖父の名前を…」

本多勲は恵太の祖父である平井操との思い出を語りだした。

当時、勲と操は同じ図書館で仕事をしており年齢も近く、二人はすぐに意気投合した。

二人とも大学のときに徳川家を専門に研究していた。好きな者の共有は何よりも人を近づける。いつのまにか唯一無二の親友になっていったのだ。

「操が土肥金山を研究するといったときは肝が冷えたよ」

土肥金山の埋蔵金は伊豆の人間の最重要秘密だった。もちろん簡単に見つかるようなところにはないし、そもそも埋蔵金があることすら知られていないのだ。さすがの操も、たどり着けないだろうと思っていた。

「でも祖父は見つけたんですね」恵太が言った。

「そうだ。観念した私は伊豆の人間の代表としてすべてを話したよ。伊豆の人間が代々守りつないだ秘密なのだ」

操は初め承知しなかったが、説得を重ね、遂にある条件付きで承知した。

「自分が死んだあと、もしも探し出す人間が現れたら全力で後押ししろ」という条件だ。

「操は研究ではなく親友の自分、ないしは伊豆の人々をとってくれたのだ」

菜奈は館長の話を聞いて、恵太を見つめた。

「操さんは、孫に託したんですね」

「そのとおりだ。だから親友との約束を果たすため助言をしよう。だが伊豆の人間として場所は絶対に教えられない」

「分かりました」菜奈と恵太はうなずいた。

「まず埋蔵金は分散されていない。そして函南図書館にもない。とある場所の地下にある。暗号が示す図書館の位置は、おそらく恵太君と私を引き合わせるためのものでしょう」

「確かに図書館の場所を示していると気づいた僕たちはすぐさま図書館に行きました」

「ただなぜ函南図書館が◎なのかは私も分からない。操と勤めていた時は函南図書館所属ではなかったからね」

「私ができるのはここまでです」

言い終わったあとの館長の顔は清々しいような、後悔したような様々な感情が混ざった表情をしていた。

菜奈と恵太はゆっくりと図書館を出た。

「恵太さん。絶対解きましよう。館長は、私たちに本当は解いてほしいと思っっている気がするんです」
「僕もです。だからもう決着をつけましよう」

恵太は菜奈の目を見つめたて言った。

「埋蔵金の場所が分かりました」

翌日、恵太が指定した場所に菜奈は到着した。伊豆に住んでここに来るのは二回目になる。前回は中には入らなかったが。

「僕、自分が暗号を作るならって考えたんです。もしも菜奈さんなら暗号にどんな要素を加えますか」

「えっと、そうですね。じゃあベルばら要素を加えます」

「分かります。僕なら絶対に源氏物語の要素を加えます」

「館長のおかげで、これが正真正銘、祖父が残した暗号だと分かりました」

恵太の祖父が好きだったもの。

「徳川ですね…」

「はい。そこで方角で考えました」恵太は地図を出して説明する。

「家康は、寅の年、寅の日、寅の刻に生まれたとドラマで聞いたことがあります」

菜奈はスマホで寅の方位を調べた。寅の方位はだいたい北東にあたる。

「函南図書館から、北東だと小田原とかですか？ピンと来ませんが」

「実は徳川家康は卯年だった説があるんです」

徳川家康が征夷大將軍になった年、無病息災と延命長寿を祈願するため願文を出した。

「六十一歳卯歳」と。つまり他人には寅年といっても神には嘘はつけなかったということだ。

「つまり、函南図書館から、卯の方位である東に進むと…」菜奈が地図に指を走らせる。

「そうです。伊豆の人は皆、そこを歴史的価値がある場所ではないと言い、歴史に詳しい人は逆に訪れないであろう場所です」

二人は熱海城を見上げた。

菜奈は図書館の職員との会話を思い出していた。

「菜奈さん、熱海城は実在しない城だよ」

「菜奈さん熱海城には歴史的価値はないよお。楽しいところだけど。でも甲冑とかは置いてるかな」

「菜奈さん、中に入らなかつたの？エレベーターも完備だよ」

誰もが一度はお城だと思い、そして本当のお城ではないと知り、ワクワクしながら入城するところだ。

まさかここに眠っているとは…

菜奈と恵太は熱海城へ歩みだした。

「大丈夫？寝てたけど」

菜奈は目を覚ました。熱海城の中のベンチで夢の世界に入っていたみたいだ。

「よく座ったまま寝れるね」そうやってきたのは彼氏の平井恵太だ。根っからの理系でエンジニアの仕事をしている。

「いや最近寝てなくて。変な夢見てた」

「どんな夢？」

「笑わないでよ。熱海城の地下に土肥金山の埋蔵金が眠っているって夢」

「ははっ面白いね」

菜奈がそう言った瞬間、少しだけ周りの空気が変わったような気がした。

い づ ひ み つ
伊豆の秘密

2023 年 10 月 28 日 発行

著者 こんどう けんじ
近藤 健司

町制施行 60 周年・かんなみ知恵の和館 10 周年記念事業冊子

発行 函南町教育委員会

製本 函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）

電話番号 055-979-8700

419-0122 静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。

（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。

作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとし、主として公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関する事柄を担います。ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとし、

東京での仕事を辞め、
函南の図書館で働き始めた菜奈。ある日、土肥金山についてのレファレンスを受けて……。
土肥金山と徳川埋蔵金の謎、伊豆の人々が隠している秘密とは？

